

シソそうか病について

松 田 鋤 男

(鹿児島県農業試験場)

MATSUDA, S.

Studies on the Perilla Scab by *Sphaceloma* sp.

鹿児島市田上町のシソ栽培地帯において、シソの地上部にそうか状病斑を生じ、落葉、立枯れを起こす新病害が発生した。同地域におけるシソの栽培歴は数十年に達するが、農家が本病の発生を認めたのは1973年ごろからとされており、特に1975年の発生が多く、栽培が放棄されたほ場も散見された。本病は少発生の場合でも葉が奇型を呈し、著しく商品性を低下させるため、シソ栽培上の重要病害として防除対策が要望されている。病原菌の分離、接種試験の結果、病原は *Sphaceloma* 属菌に属し、シソの外、レモンエゴマに病原性を示した。 *Sphaceloma* 属菌によるシソ病害についての報告は見当らず、未記録の病害と考えられるので、病徴、病原菌の形態、病原性について報告する。なお本病をシソそうか病とすることを提案する。本報告をとりまとめるに当っては、クミアイ緑化事業株式会社香月繁孝博士に有益な助言をいただいた。記してお礼申し上げる。

病徴 本病は苗床初期から発生し、7月まで急激に蔓延するが、夏季の高温乾燥期には一時停滞し、秋季になって再び蔓延する。茎、葉、花軸、がくなど地上部の各部位に発生する。初め淡緑色、円形または紡錘形で1～10mmの隆起斑を生じ、後に灰褐色または紫褐色の疣状斑となり、つづいて灰白色に変る。多発生時には隣接病斑が相接して不整形の大型病斑となり、往々にして茎全面をおおうこともある。葉では、おもに葉脈部が侵され、病斑部は突出し、その裏面は凹陷する。茎葉に多数の病斑が生ずると落葉し、また落葉のはなはだしい場合には株の立枯れをきたし、花軸、花が侵されると開花、結実が不良となる。

病原菌の形態 子座状菌糸類は病斑中に散生して山状に盛り上り、淡黄褐色で往々にして隣接のものとゆごう

して長い層状となる。分生子梗は暗色、突起状で山型の層状をなして並列する。分生子は楕円形または一端が細まり、無色、単胞、大きさ $4.8 \times 8.3 \times 2.8 \sim 5.0 \mu$ (平均 $6.5 \times 3.8 \mu$) で普通両端に各1個の油滴を含む。菌糸は無色または淡黄褐色で隔膜があり、時に数珠状を呈し、その幅は一定でないが、 $2.0 \sim 5.1 \mu$ で変色部の細胞間隙に蔓延する。以上の形態から本菌は *Sphaceloma* 属菌に属するものと考えられる。

病原性 病原性を確認するための接種は、培養して得た分生子懸濁液をシソの健全苗に噴霧接種し、気温 25°C の温室中に48時間保って行なった。その後、屋外で栽培し毎日発病状況を観察した結果、接種後10日内外で初期病斑が認められ、接種したすべての苗に病徴を再現することができ、また病斑上には *Sphaceloma* 属菌の分生子が確認された。本菌の寄主範囲を明らかにするため、シソ科植物21種(シソ、チリメンシソ、アオチリメンシソ、エゴマ、レモンエゴマ、ヒキオコシ、ヤマハッカ、ヒゴロモソウ、アキノタムラソウ、ヒメシソ、イヌコウジュ、ハッカ、クルマバナ、トウバナ、カキドオシ、ホトケノザ、オドリコソウ、キラソウ、ツルニガクサ、ハナトラノオ、ニシキシソ)、既述の *Sphaceloma* 属菌の寄主植物22種(シャクヤク、オオバコ、ニョイスミレ、サツマイモ、ダイズ、ハギ、ヘクソカズラ、アケビ、ブドウ、ヤマブドウ、ウド、ヤツデ、ノイバラ、バラ、マサキ、チャ、ウメモドキ、ヤナギの一種、タイワンギリ、イチジク、コウゾ、カザノキ)に孢子懸濁液を噴霧接種するとともに、発病シソ株を混植した。接種90日後までの間に発病が認められたのはシソ科シソ属のシソ、チリメンシソ、アオチリメンシソ、レモンエゴマのみであった。